



戰艦大和

吉田
滿



戦艦大和

定価 三二〇円

昭和四十一年十二月十五日 初版印刷

昭和四十一年十二月二十日 初版発行

著者 吉田 もんだみつる 満

発行者 河出朋久

印刷者 草刈親雄

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の六

振替 東京 一〇八〇二

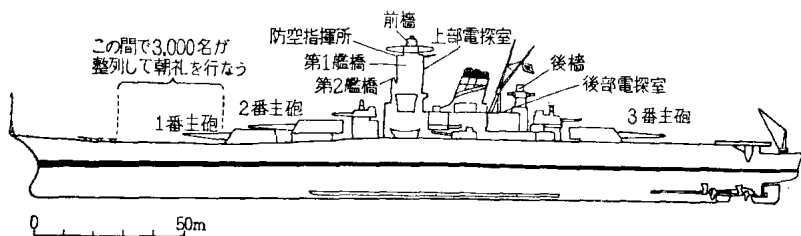
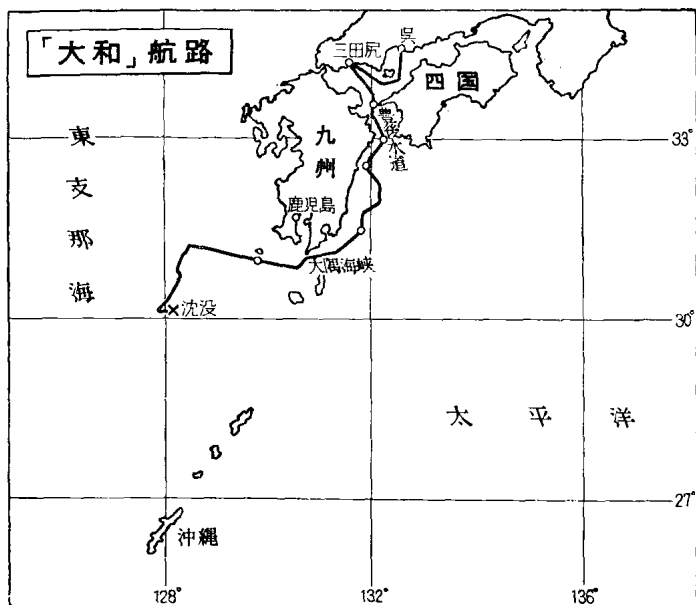
電話 東京 (三三) 三七一一

目次

戦艦大和の最期	……………	五
占領下の「大和」	……………	一三
一兵士の責任	……………	一四
異国にて	……………	一七
散華の世代	……………	一八
あとがき	……………	二〇
跋	……………	二二
文 吉川英治・小林秀雄・林房雄・河上徹太郎・三島由紀夫		二五

裝
幀
真
鍋
博

戰
艦
大
和



〈性能〉

排水量(満載) 72,809トン

全長 263メートル

最大幅 38.9メートル

最大速力 27ノット

航続距離 7,200哩

〈主要兵器〉

主砲 46センチ3連装砲塔3基(9門)

副砲 15.5センチ3連装砲塔4基(12門)

高角砲 12.7センチ2連装12基(24門)

機銃 25ミリ3連装44基(132門)

13ミリ連装8基(16門)

飛行機 (水偵および観測機)6機

戦艦大和の最期

停泊

昭和十九年末より、われ少尉（副電測士）として「大和」に勤務す

二十年四月、「大和」は呉軍港二十六番浮標（ブイ）に繫留中、港湾のもともと外延に位置する大浮標なり

来たるべき出撃に備え、艦内各部の修理と兵器（ロケット砲、電探等）増備のため、急遽「ドック」に入渠の予定なり

二日早朝、突如艦内スピーカー「〇八一五（午前八時十五分）ヨリ出港準備作業ヲ行ナウ 出港ハ一〇〇〇（十時）」

かかる不時の出港、前例なし
されば出撃か

通信士より無電および信号の動き激し、との情報とどく

われを待つもの出撃にはかならず 入渠準備と称しての停泊も、眞実は出動の偽装ならん
我ら如何にこの時を期して待ちしか

我ら国家の干城かんじょうとして大いなる榮譽を与えられたり いつの日か、その証あかしを立てざるべからず
我ら前線の将士として過分の衣食を賜わりたり いつの日か、その知遇に報いざるべからず
出撃こそその好機なり

また日夜の別なき猛訓練もここに終止し、過勞と不眠の累積よりついに我らを解放せん

時に米軍沖縄本島上陸後、わずかに二日なり 作戦はおそらく同方面に発動せん
風評しきりに艦内に流る

関門海峡を通過、佐世保にて裝備補給、釜山みざんにて給油の上南に向かう、と
あるいは豊後水道ぶんごより堂々直進せん、と

作戦海面何処いずこ 「大和」に従う僚艦は何 艦隊編成如何いかん
進んで決戦を求め、米艦隊と雌雄を決せん

その囁きを圧し、凜たる艦内スピーカーあいっついで令達す

「各分隊、可燃物ヲ上甲板ニ出セ」

「各自ハ身ノ回り整理、終ワレバ私物ヲ吃水線下ニ格納セヨ」
きつすいせん

「艦内警戒閉鎖トナセ」(火災および浸水予防のため、通路の「ハッチ」、各室の鉄扉鉄蓋をすべて閉鎖す)

「陸上へノ最終便（連絡艇）ハ〇八三〇（八時半）ニ出ス」

「艦内閉鎖状況、直チニ各分隊長点検」

命令号令乱れ飛ぶ 流れ去る時の速さ

陸上への最終便の短艇指揮を指命され、第一内火艇により第一波止場に向かう

薄雲全天を蔽い、海面煙り、睡るごとき軍港街常と変わらず 朝風のたゆたい 全速に直航する艇

波止場に着き用命を達して、三たび未乗艦者なきやを確かむ（出撃に際し出港に遅るれば銃殺の定めなり）もとより未乗艦者、残留者なし

これが俺の足の踏む最後の、祖国の土か、ふと思う

全速返路を「大和」に向かう 微風快し

外舷を銀白一色に塗装せる「大和」、四周を圧して不動磐石の姿なり

「大和」に近く停泊せる「矢矧」（新鋭巡洋艦）より発光信号「ワレ出撃準備ヲ完了シ……」生氣を孕んで点滅す

帰艦 身の回り整理の必要なし 直ちに出港準備作業に就く

出 港

一〇〇〇（十時）「大和」出港 艦静かに前進を始む 出港は港内に本艦一艦のみ

秘かにして悠容たる出陣

停泊中の僚艦より、千万の眼、まなこ無言の歎呼をこめて我らに注ぐ

われこそ彼らが興望を担うもの 一兵までも誇らかに胸張って甲板に整列す
想えば、巨艦往って再び還らざる最後の出港なりき

たちまち広島湾を過ぎ水道にかかる

各電探兵器の作動良好なるを確かめ分隊長に報告

平常のごとく航行時の態勢変化を利用して、対空、対艦訓練を開始す

艦内スピーカー「入港ハ一七〇〇（午後五時）頃ノ予定、入港後直チニ総員集合ヲ行ナウ」

出撃命令下達の総員集合なるべし

訓練のための旋回、反転を繰り返しつつ針路は周防灘すおうなだに向かう

艦長、幕僚（艦隊参謀）と作戰討論をたたかわす 海図台上に赤表紙、分厚なる書類あり

背文字は太く「天一号作戰關係綴」つづり 「天」号作戰とは「回生の天機」の意味ならんか

海図は沖繩本島周辺の詳細図数枚を重ねたり 「コンパス」を「大和」主砲の射程四十キロ、十里（縮尺目盛）に合わせ、米軍上陸地点を中心に海図上に弧を描く 上陸地点砲撃時の、本艦の予定針路なるべし

「コンパス」を握る参謀の爪、力こもって白く濁る

押し殺せる声の応酬続く　艦隊編成、針路、掩護機、発進時期等、難問題 重畳ちようじようせることし

待　機

薄暮、三田尻沖に仮泊す　近路の狭水道を通過して直行せる駆逐艦、われに先んじてすでに数隻入港しあり

機密保持のためそれぞれ別個に出港し来たりて本錨地ほんがいうちに仮泊し、陸上との交通を絶ちたるまま最後の出動命令を待つ

その間、数日の休息に回天の英気を養い、無我の心境に必死の闘魂を磨かんとす

総員集合　戦闘略装のまま総員上甲板に整列　管制下の暗夜、鎮しずまる三千名の呼気

艦長、本作戦の目的——（米沖繩上陸軍の迎撃）、本艦の使命——（その全き根幹）を述べられ、総員の奮起を切望せらる　副長「神風大和ヲシテ真ニ神風タラシメヨ」

米機動部隊近接、明早朝来襲の公算大なりとの報あり

我らが出足を挫かんとするか

戦闘服装のまま眠る　心はやるも熟睡す

三日早朝、米軍来襲の報　配置に就く

急速出港、第一警戒航行序列に散開す（各艦の位置を哨戒及び防禦に適することく散開して航行す　第一序列は防空、第二は砲戦対勢なり）

不時の来襲に即応すべく内燃機関を暖めて待機す（通常の冷却状態より「スクリュウ」の作動までには二十四時間を要す）

潮のまにまに漂泊

出動は米機動部隊の避退後なるべし 焦るべからず

午前、B 29 一機直上を通過、高空より盲爆を行なう 投弾中型一箇 われに損害なし

されど写真偵察を行なえるか 本艦隊の動向すでに蔽いがたきか

午後、ラジオ情報頻りに入る 本土の各地、熾烈なる空襲を受けつつありと

「しばらく待て」心に叫びて止まず 我らが出撃奏功せば、銃後の惨禍を些かなりとも軽減し得べきものを

日の落つるを待ち、昨夜投錯せし錨地に再び仮泊す

かかる非常の時、数日前兵学校を卒業せし新候補生五十余名、大発（木造艇）を横付けて乗艦しきたる

「大和」乗組の光榮の故か、紅顔、夜目にも鮮かなり 数組に分かれ直ちに艦内見学を始む
艦内に清新の気香る 彼らが真に戦力となるはいつの日か

通信科所属の敵信班、米機間の緊急信号を傍受し、即刻翻訳して艦橋に報告しきたる

「米機動部隊ハ明日一日各地ヲ空襲ノ上、東方ニ避退セン」との情報を確認

避退に追尾してのわが出動か

出撃迫る　夜食うまし

通信士中谷少尉「ハンモック」に俯し、声を忍んで嗚咽す　肩を揺すれば一葉の紙片を差し出す彼、「カリフォルニア」出身の二世なり　慶応大学に遊学中、学徒兵として召されたるも、第二

人は米陸軍の下士官として目下欧州戦線に活躍中という

醇朴の好青年にして、勤務精励、特に米軍緊急信号の翻訳は彼が独擅場なり　されど彼が二世出身の故をもって、少壮の現役士官より白眼視され、衆人環視のうちに罵倒されしことも一再ならず　深夜、当直巡回中、甲板上に佇む人影を見しはかかる折りなり

一葉の便箋にたどたどしき文字にて誌す「お元氣ですか　私たちも元氣で過ごしています　ただ職務にベストを尽くして下さい　そして、一しよに、平和の日を祈りましょう」

待望の、母上の手紙なるべし　家族よりの便りを手にしばしば欣喜雀躍する戦友のうちに、ただ独りかつてついにこの歓びを知らざりし彼　故郷を敵国に持ちたる者の不運として諦め居たる彼ただ中立国「スイス」を通じてわずかに通信の途残されたるも、最後に、死の出撃の寸前に、この機会の到来したるか

字数の制限の故か、文面あまりに簡潔　あまりに直截

「一しよに、平和の日を祈りましょう」万感籠めたるこの一句は、今しも米語の暗号解読より解放されしばかりの彼が肺腑を、完膚なきまでに貫きたるべし

母上が心やりの、痛きまでに真実なるよ　われ言葉もなく「ハンモック」に上がる

四日早朝、米機来襲の報　配置に就く

午前午後、前日と同様満を持して漂泊警戒す

駆逐艦「響」^{ひびき}漂泊中、浮游^{ふゆう}せる機雷に触れ水煙を上ぐ　被害は比較的軽微なるも、汽罐に損傷を受け航行不能に陥る　やむなく僚艦「初霜」の曳航^{えいこう}により、呉に回航と決定
遠ざかる艦影　見送る残存艦の甲板上に、羨望^{せんぼう}の眸^{ひとみ}、悔恨の嘆息

一五一五（三時十五分）より一九一五（七時十五分）まで副直将校に立つ　警戒中のため通常の舷門勤務にあらず、艦橋勤務なり

艦内の綱紀万般を掌握する副直将校

乗艦当初、弱冠、しかも学徒出身士官のこの身に、四時間当直の勤務のいかに苛烈なりしか　一瞬の隙なく艦の四周を警戒し、停泊艦の動向に留意し、更に艦内日課を計画、実施、点検せざるべからず　副直将校は常時駆け足にして歩行を許されず

艦長、士気振作の方策に関し所見を述べらる　「明日ヨリ警戒配備ノママ総合訓練及ビ体育別課ヲ行ナワン」と

呉出港以来、連日の緊急配備のため、伝統の猛訓練は中絶のやむなきにあり

二日間の休養に兵員の体力やや挽回せるも、なお積日の過労を挽回するにいたらず

されど気力の弛緩をこそ戒むべし 訓練再開は士気振興の妙策ならん

米機動部隊わが出動を牽制せば、われまた最善を尽くしてこれに対せん

夕食後、「矢矧」より第二水雷戦隊司令官来艦、「大和」坐乗の第二艦隊司令長官と要談する 作戦細目の検討ならん

のち明らかにされたるも、九州鹿屋基地にある豊田連合艦隊司令長官より逐一令達されつつある「天号」作戦に対し、第二艦隊長官伊藤中将は、当初より強硬なる反対を表明し来れるものごとし

反対論抛の第一は、わが空軍掩護機の皆無（鹿屋よりの作戦命令によれば一機の友軍機なし）

第二、わが海上兵力の劣勢（わが方は駆逐艦八を含む十隻、敵は少なくとも三十隻を下らず）

第三、発進時期の遅延（下命は米機動部隊避退の半日後なり、これを半日繰り上げ避退軍に全く膺接して進攻するを可とす）

少なくとも発進時期の最終的決定は現地指揮官に一任すべきが当然なりと、伊藤長官は切齒扼腕せりという

艦内極めて平穩なり

通信參謀より、艦隊各艦宛書類送付の短艇指揮を下命さる 暗号關係緊急書類なるべし

艦橋に上がれば、星なき暗夜、遙かの陸岸に本日の空襲により炎上中らしき微光二点を認む
二一〇〇（九時）、用命の完全なる達成を期して、各艦の仮泊位置、風向風速、潮流、海図を確かめ、手帳に誌して舷門に急ぐ

予想所要時間二時間半 使用艇は馴染みの一号大発（木造艇） 艇長は手練の相本兵曹
一面漆を流したるとき背景のうちに艦影を捉え、まさぐりつつ舷門に近付く まさに絶好の夜
間短艇達着訓練というべきか

乗艦当初、連日朝食前の一時間を、黎明達着訓練に捧げたるを想う すべて今日に備えたり
艇長および艇員二名、終始黙々として着艦、離艦作業に従う

僚艦九隻、暗黒の洋上に坐して動かず そこに今つつしみ眠る、五千の將兵

散開して仮泊せる全艦を一巡、「大和」に急ぐ ふと水面に、薄緑に妖しく映ゆるもの

艇尾波に漂う夜光虫なり 燐光の潮のごとし

帰艦、任務完了を通信參謀に報告 二三三五（十一時三十五分）

艦橋に上ればすでに一点の微光を認めず さきに炎上中の陸岸も鎮火したるべし

寢室にて電測訓練記録を整理 梁にわたせる「ハンモック」にほとんど蔽われたる机に、匍うごとく向かう 終わって瞑目することしばし